

DX とレガシーシステムの協調を可能とする過渡期のシステムモデルの研究

アブストラクト

1. 研究の背景

近年、デジタル社会における事業と技術の変化は激しく、特に、IT 技術を活用した業務の変革については、ビジネスサイドのニーズも多様化、複雑化している。一方で、システムサイドにおいてもスピードと品質の向上などの高度化が要求されている。これらに対応するための一つの手法として、「DX」が期待されているが、ビジネスサイド・システムサイド共に、DX に関する知識が不十分であり、現状、効果的な DX 化の実現には至っていない。また、企業が抱えるレガシーシステムは、膨大かつ複雑な機能とデータに基づき運用されており、技術的にも陳腐化などの課題を抱えている。このようなレガシーシステムにおいて、ビジネスサイドの新たなニーズに対応するのは困難であり、レガシーシステムを大々的に DX 化することは、ビジネスサイド・システムサイド共に様々なリスクを伴う。

これらの背景を踏まえて、当分科会では、ビジネスサイド・システムサイド双方で認識している問題を解決するための一つの指標として、「レガシーシステムと協調し、段階的に DX へ移行する事を前提としたシステムモデル」が必要であると考えた。また、そのモデルを「過渡期のシステムモデル」と位置付けた。

2. 研究へのアプローチ

ビジネスサイドからの新たな DX 化のニーズを、具体的なシステムモデルに落とし込むことができないうシステムサイドの問題は特に深刻である。当分科会では、「過渡期のシステムモデル」を研究するにあたり、以下の2点を問題として取り上げた。

- (1) 現在のレガシーシステムと協調したシステムモデルを描くことができない
- (2) DX の効果的な適用範囲や優先順位などが不明確である

また、当分科会ではこれらの問題を解決するために達成すべき課題は以下の2点であると考えた。

- (1) DX 化を推進するための指標が必要
- (2) DX の段階的な適用範囲や優先度を判断する評価基準が必要

これらの課題を達成する事でシステムサイドが抱える問題は解決できるという仮説を立て、仮説の検証に向けては TOBE 像の検討を行いその結果を踏まえて、実際に DX 化を検討する現場での使用を想定しながら活用ツールを作成した。活用ツールの有用性と妥当性の検証については、当分科会の参加企業が各社の対象者にアンケートを実施し回答内容より分析と評価を行った。

3. 研究成果

活用ツールは、「マルチプラットフォーム」「データ利活用」の2つの観点が必要であると考え、これらの観点より以下の2点を作成した。また、実際に現場で DX 化の実現に向けた検討を進める際の指標や評価基準とする事を前提に本ツールを研究成果として定めた。

- (1) レガシーシステムと DX が協調し、段階的に DX 化するケースのシステムモデル
- (2) システムモデルごとの適用診断チェックシート

4. 総括

「過渡期のシステムモデル」の実現においては、当分科会で作成した活用ツールを用いる事により、取り上げた課題に対する仮説を立証すると共に一定の効果は期待できると評価した。また、今後の検討の大きな足掛かりになることも確認できた。今後は、コスト削減やシステム更改などを契機としたシステムサイドのニーズによる DX 化の実現に向けた検討の取り組みも重要な課題である。